



Title	西宮神社十日戎開門神事福男選びの人類学的研究
Author(s)	荒川, 裕紀
Citation	大阪大学, 2016, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/55695
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏名（荒川 裕紀）

論文題名

西宮神社十日戎開門神事福男選びの人類学的研究

論文内容の要旨

本論文は、兵庫県西宮神社で毎年1月10日に行われる「十日戎」における開門神事に関するものである。これは、毎年1月10日の午前6時に表大門（通称赤門）が開け放たれ、参加者が本殿に参るという行事である。

西宮神社は本殿に着いた参加者のうち1着から3着までを「福男」として認定し、神前にて報告したのち特別の祈禱を行う。2015年には5000人を超える人が参加する行事となっており、在関西のメディアはもとより日本の全国ネットが取り上げ、年々報道は拡大している。本調査者は1997年より当調査地に入り、主催者である西宮神社関係者、参加者、ならびに氏子である地域住民への面接調査、質問紙調査などを行ってきた。同時に二次的資料として西宮神社に存在する社務日誌、新聞資料などを基に当神事の起源、そしてその変遷についての調査、そして歴史学者、民俗学者による先行研究の考察を行ってきた。

その歴史的調査で明らかにしたことは、当神事が①「イミ・ミカリ」と呼ばれる神人和合の境地に達する「忌籠」が起源であること。②現在の形へと変容する際に旧暦と新暦の問題、そして電鉄がもたらした新しい参詣形態が参詣客の増加に大きく寄与したこと。③大正・昭和初期の中で地方部からの人口の流入があり、彼らがこのイベントの担い手となっていったこと。④太平洋戦争によって神社自体が被災したものの、門開けの行事はその後も続けられたこと。⑤戦後から高度経済成長期に自動車の普及によってより遠方からの参詣客が増え、十日戎自体の規模は巨大化するが、それに反比例して門開けが新聞などに上げられることが少なくなってきたこと。⑥しかし、そのために旧来のえびす信仰の残っている地域からの参詣が可能となったことで、彼らによって走り参りが継続されていることが報道されることで改めて神事としての価値に気付かされることとなったこと。⑦昭和晩期から平成にかけて「開門神事」「福男選び」の語句が生み出され、その後定着してきた事実。などであった。参与観察を続けることによって明らかにしたのは、当「神事」の運営主催者が存在しないということであった。もちろん神社側が門を開け、福男を「認定」するが、それ以外の参加者の門前での出走の順番決めや安全対策などには、神社や地元住民がほとんど関わっていないという事実が判明したのである。この主催者の不在が、2004年1月に起こった「事件」をもたらすことにもなった。この後、当事件の反省を踏まえ、新たに神社と参加者、加えて地元住民を繋ぐ組織が要望されることとなった。本調査者はあくまで調査者の立場であったが、10年近く参与観察を続けていたこともあり、「神事の参加者」としてこの組織の立ち上げに加わることとなった。

本論文においては、これまでの歴史的変遷、そして自身が参与観察してきた記録を社会に発信することを一つの目的とした。同時に調査者が調査対象に入り込むことでどの様に変化をしていったのかについてのエスノグラフィの発信も行った。

章立てとしては、序章にて、本研究に至った動機、問題の設定と方法について、まずは論じた。その上でこれまでの都市における祭礼や西宮神社における先行研究を提示し、その中から本論文がどのような立場にてこの神事に関してアプローチするのかを示した。

第1章と第2章では、西宮神社の十日戎がたどった歴史的変遷を、近世・近代の発展から追った。特に明治晩期以降の電鉄の発展と、産業都市化が新たに「開門」の概念を生み出し「一番福」を生み出したことに言及した。第3章では、民俗学などでよく語られる、戦後から高度経済成長期およびポスト経済成長期の変遷・変容について資料や語りから明らかにした。そして、昭和から平成への過渡期に際していかに十日戎の福男競争が福男「選び」と変化したのか、また以降の参加者の増加につながったかについて、同時代史的なアプローチを行った。

第4章では、1997年からは自身の参与観察とともに福男を中心としたインタビューと資料から変遷を明らかにした。特に2004年には、西宮神社では前述した参加者の急激な増加と神事の変動に旧組織自体がついていけない事態となった。10数名の参加者が1週間前からテントで野営しながら門前を占拠してスタートの好位置を独占し、他の参加者をブロックすることでこのグループの特定の参加者を一番福にさせるという事件が起こった。門を開けるだけという神社

側の関与スタンスと参加者側のルールの欠如から起こるべくして起こってしまった出来事であった。しかし、在阪・在京のメディアはこの事件に鋭く反応し、視聴者は批判を行った。特にインターネットの掲示板空間では大きく取り上げられ、それまでの神事への多数回参加者や参与観察をしていた本調査者にまで、その批判は向けられたのである。

この事態に際して神社もついに立ち上がり、参加者や地元の自治会・氏子青年団が協議をする機会が持たれた。2005年からはそれが奏功し、この神事が生まれて以来初めて、参加者と神社そして地元の自治会・氏子青年会が一緒になって祭事を作り上げるという動きとなった。同時にこの参与観察とともに、前章で明らかにした開門神事福男選びの歴史の変遷の中で、各時代を象徴する6名の福男のインタビューを紹介した。これらの福男の語りから言えることは、当初は一番に福をつかむという競争的な意味合いで参加していたが、時代、背景は違えども、多くの語りの中に「えびす」に対する信仰が、長く息づいていることであった。それが行事に参加した中で得たものなのか、福男として生きていく中で付与されていったのかは、それぞれであろうが、各人が自らのアイデンティティの確認のために走ったといえることを確認した。

第5章では、2004年以降の具体的な「組織化」について、また近年になって日本各地で生まれたこの開門神事の模倣イベントのうちで、西宮神社が「公認」した2つのイベントの概要についても挙げている。結果としては、2005年から参加者有志が神事の執行者となり、警察の指導もあり2008年に講社化することにも繋がった。この2004年からの一連の民族誌は、走り参りしか接点のなかった一参加者が、神事の主催者、西宮神社の「縁者」として機能し始める興味深い事例となった。その中で、参与観察者であった本報告者も積極的に関与することとなったことは、研究者が研究対象の当事者になる一事例を示せたと言える。また、模倣イベントに関しては、東北の二つのイベントが西宮神社の公認となっている。ここには「震災復興」のメッセージ性が継承された。西宮神社が創り出す「正統性」と、イベントを開催する側の思惑が合致したとも言える。「物忌」という部分が欠落した上での広がりであるが、福男という知名度の高さ、「イベントのわかりやすさ」、特別な準備も必要なく誰もが参加できる「合衆性」などがよさこい系イベント等よりも高いために、これから先、更に広がっていくのではと結論付けた。

第6章は、2001年より本調査者が参加者に対して行った質問紙調査に関するものである。具体的にどのような層がこの神事に参加しているかという属性分析を行った。ここで一番興味深い結果だったのは、2004年以前と以後で、参加している地域が変容したことであった。2005年以降では西宮や旧摂津地域からの参加者が減っており、その部分が他の関西からの参加者にとってかわった。西宮の伝統的な祭事には直接関わりの少なかった、大阪を中心とする参加者たちが、テレビを見て、住んでいる地域と西宮神社が交通至便でアクセスも容易であったこと、なにより「えびす信仰」に関する同質な文化的背景を持っていたため、多く参加するようになったのではと結論付けた。動機や感想に関する回答からは、普段運動をしており、競走の側面で慣れている参加者が多い中、開門神事に関しては非日常性を語っているものが散見された。速さ、競走の部分が強調され、きっかけとしてはそれが動機となり友人などを誘って参加するが、実際に参加してみると、それ以外の部分をより体感する。さらに複数回参加した参加者からは、自らのアイデンティティの確認のために参加しているという回答もあった。

結章では、これまでの流れで、歴史学・民俗学・人類学・社会学からこの神事を捉えた。当論考で明らかにしたことは、①当神事が産業都市化によって、これまでの祭礼が変容して生み出され、その過程の中で西宮の町が持ってきた「忌籠」が援用される形で「開門レース」が新暦で行われることとなった。②高度成長の中で、相対的に新聞などでの扱いは小さくなるものの、モータリゼーションによって戒信仰の意義を持った漁村地域の参加者が意味を再発見し、またその意味性を神社が取り上げ、昭和晩期の「自粛」を「競争」から「神事」と読み替えることで、見事に存続を図った。③文化人類学の文脈で語れば「創られた伝統」であるが、マスメディアや社会がそれを受容したことなどである。社会的な祭礼に関する需要に対しては、その「参加自由度の高さ・合衆性」から、多くの参加者を惹きつけたということを定量調査、面接調査、さらに参与観察によって明らかにしたのである。

社会需要に変容をしながら応えていったという意味で、興味深い事例である。この参加自由度の高さから2004年の事件へとつながったが、そのことが、新たな縁（選択縁）を生み出し、地縁とは違う「合衆性」が生まれ、それが主催者となって現在の神事を支えている。現在、模倣のしやすさから、各地で模倣イベントが起こっており、西宮神社が「公認」するという動きがある。合衆性のイベントとして1990年代より現在まで大きな動きとなった、よさこい系イベントのように発展を遂げる可能性を秘めている。これから、どのような意味性を持たせながら更なる変容を続けていくのか。今後も調査者として更なる付き合いを続けていくことは、意義があると考えられる。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (荒川 裕紀)		
	(職)	氏 名
論文審査担当者	主 査	大阪大学 教授
	副 査	大阪大学 教授
	副 査	大阪大学 准教授
論文審査の結果の要旨		
以下、本文別紙		

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：西宮神社十日戎開門神事福男選びの人類学的研究

学位申請者 荒川 裕紀

論文審査担当者

主査 大阪大学教授 川村邦光

副査 大阪大学教授 杉原 達

副査 大阪大学准教授 宇野田尚哉

【論文内容の要旨】

本論文は、西宮神社の十日戎開門神事における福男選びに関して、文献によってその変遷・展開の過程を歴史的に跡づけて分析するとともに、フィールドワークを通じて現在の様相を解明することを目指している人類学的研究である。

序章では、祭礼研究に関する先行研究を批判的に検討して、祭礼・神事の現場から調査研究することの重要性を指摘し、研究方法として祭礼・神事の調査者としてのみならず、参加者・参与観察者としてのフィールドワークに基づいて、十日戎開門神事の研究を通じて現代社会における都市祭礼の新たな姿を考察することを研究課題として設定する。

第1章では、西宮神社の十日戎の歴史的な変遷について論じている。中世以降、十日戎は神社に籠る物忌であり、神人共食が行なわれる祭礼だったが、参詣者に福を授ける現在の形の十日戎の祭礼へと変化したことを文献資料や先行研究から明らかにしている。

第2章では、大正期から戦前までの開門行事について、社務日誌および当時の新聞から社会情勢と関連させながら明らかにする。阪神電車の開業によって新暦の十日戎に参詣者が多くなり、開門により先頭で参拝すると福が来るという「一番福」の新聞記事が見られるようになったことを指摘する。第3章では、戦後から現在までの開門行事を検討している。それは正式に1953年に8年ぶりに復活し、高度成長期に盛んになったが、危険防止の理由で1966年にいったん中止となった後、マスメディアでは開門行事を神事として報道して、開門神事という言葉が定着する一方で、たんなる「走りのイベント」として広まっていったことを指摘する。

第4章からは、1997年から開門神事のフィールドに入り、参与観察してきた成果が新聞記事を参照しながら記される。2004年、大阪市の消防士グループがスタートの好位置を独占し、走者を妨害する事件が起こった。そこから、参加者と神社と一緒にこの神事を運営していこうとする機運が生まれた。4名の福男（また2名の福男の遺族）に対して行なったインタビューが載せられ、いずれも一番福を獲得するという競争意識で参加しているが、そのインタビューのなかから、福男となることによって「えびす信仰」が生まれていることを指摘している。

第5章では、2005年から現在までの動向について述べている。2004年の事件後の対策、また警察から要請された危険防止のために、神社や氏子青年会、それに元福男を含む有志が集まり、対策を講ずる話し合いが行なわれ、神事に関わる「西宮神社開門神事保存会」が生まれ、2008年にはそこから「開門神事講社」が成立して、神事を運営するようになるプロセスを明らかにしている。そして、この開門神事になったイベントが2013年から東日本大震災に見舞われた宮城県などで行なわれるようになったことを記している。

第6章では、2001年から2015年まで行なった、800名以上の開門神事参加者へのアンケートの結果を挙げている。テレビを中心としたマスメディアによる盛んな報道、西宮神社へのアクセスの容易さ、そして「えびす信仰」に関する同質な文化的背景などを要因として、大阪を中心とする参加者たちが多くなっていったと指摘する。結章では、全体をまとめて、現代の都市民俗に関連づけて考察している。

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、西宮神社の十日戎開門神事における福男選びに関して、多くの文献資料を用いて歴史的な展開プロセスを究明するとともに、1997年から現在にいたるまで、この開門神事に参加して、フィールドワークを通じて研究してきた成果である。文化人類学や民俗学、社会学、観光学といった諸領域にわたるアプローチを行ない、現在では何よりも自らが開門神事を担う開門神事講社の一員として、参与観察をしてきたところに、本論文の大きな特徴がある。以下、評価できる点を挙げてみよう。

第一に、十日戎開門神事の歴史的な変遷・展開に関する先行研究がこれまでなかったなかで、この神事の形成プロセスを明らかにしている。新聞記事を詳しく調べて、「一番福」の言葉が1914年（大正3）、また「福男」の言葉が1939年（昭和14）に生まれたことを指摘している。第二に、4名の福男、また2名の福男の遺族に対して行なったインタビューは興味深い。高度成長におけるモータリゼーションによって、兵庫県北部などの漁村部の参詣者が現われ、そのなかで香住水産加工業協同組合の「えびす講」の者が福男になっており、西宮神社の十日戎でいわば本来のえびす信仰が復活したことを明らかにしている。第三に、文献調査・面接調査・質問紙調査、そして自らをその場に置いた参与観察によって、この開門神事に様々な人々が「選択縁」によって集まり、そして集合的沸騰が起こる場、参加者にとってのアイデンティティ確認の場となっていることを明らかにしているように、都市祭礼の研究のすぐれた成果である。

開門神事の参加者に対するアンケート調査の結果は興味深いものであり、「アイデンティティ確認のために参加する」というものが多かったことを挙げている。だが、このアイデンティティとは様々な要素で構成され、どのような要素が参加者のアイデンティティ意識をもたらしたのかについて具体的に分析する必要がある。また、漁業関係者が福男となり、そこに「えびす信仰」が見られると指摘するのはいいが、参加者全体に「えびす信仰」があると一般化するのには問題があり、どのような「えびす信仰」なのかについて検討することが大切である。だが、こうした残された課題はもとより本論文の意義を損なうものではなく、今後の研究を深化させていくうえでの課題と考えられるべきものである。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものであると認定する。